

向陽介護便り

平成27年8月 第111号

発行人: (有)向陽介護システムズ
新宿区西五軒町1-5 春山ビル1階

TEL 03-3267-2015

戦後70年に思う

戦後70年の節目の夏を迎え、安保法制の改正問題も相俟ってか、先の戦争に関する報道やドラマ、映画等の話題で世間が賑わっています。

私は敗戦から7年後に生まれ戦争は全く知りません。ただ、先の戦争を取り上げた報道に接する都度、完膚無きまでに破壊され焦土と化したこの国が、驚異の復興を遂げ、世界の先進国に仲間入りが出来たのは、一体誰のお陰で、誰に感謝すべきなんだろうかとの思いが頭に浮かんできます。まずは先の戦争や戦後の混乱期を必死の思いでくぐり抜けてきた私の父や母たちの世代に感謝をすべきではと私は思います。



兄 母(大正6) 姉 弟 姉 兄 私 父(大正元)
昭和29年当時の家族集合写真

丁度、読んでいる本『父が子に語る昭和史』の前書きにこんなことが書いてありました。
『人は〈時代〉と〈歴史〉に生きる存在ではないだろうか。

〈時代〉に生きるとは、自らの人生を自らの考えで、あるいは与えられたその時代的制約の中で生きるということだ。教育を受け、職業を持ち、家庭をつくり、子供を育て、という人生のサイクルのもとに自らの一生を全うすることだ。

〈歴史〉に生きるとは、そういう自らの生き方のなかに、好むと好まざるとにかかわらず歴史とふれあっている部分があり、それを意識している姿勢である。

「歴史」とふれあっている部分というのは、自らの存在が祖父の世代・父の世代の投影であり、そこに投影されたもの(文化や伝統)を子や孫に伝えるということだ。…(中略)…

自分の人生だ、何をしようと勝手だ、自分が好きなように行けばいいのだ、という考えがあり、それはそれで結構なことだが、しかしそれでは単なるわがままということではない。経済活動のみに埋没し、自分の楽しみだけを追い求めるタイプが、しばしば得手勝手な態度をとるのは〈歴史〉に生きるという視点に欠けているからだ。〈歴史〉を意識すれば、何がしかの文化や倫理、さらには人間的素養というものを身につけなければならないと気付く。むろん歴史的事実をすべて肯定し追随するということではなく、自分は歴史から何を学んだかという姿勢を次代に伝えるという意味なのである。

そして、こう続いています。

現代日本は、全く新しいタイプの解体状況にあると思う。』

日本の皆保険・皆年金制度は世界に誇るべきものであり、介護保険制度では、日本がお手本にしたドイツが、逆に日本のケアマネシステムを賞賛している状況です。これら社会保障は、戦後の日本再建に尽力した私の父や母たちの世代に対して日本社会全体からの褒美と言えるかも知れません。

戦後の美味しい所を享受してきた団塊の世代以降の世代にとって、今後介護保険や年金の制度が厳しくなっていくのは当然(歴史の摂理)かも



・近所の子供達に紙芝居を見せている兄と私